

はじめに

弊団体の研究誌をお取りいただき、ありがとうございます。私どもの研究誌では、毎年「鉄道と実社会の関連性」というコンセプトを根幹に年ごとにテーマを変えながら鉄道の役割を考察しています。一昨年は直通運転の利便性を、昨年は廃止路線問題について扱い、ともに数量的な分析をメインとした研究内容となりました。しかし、今年はその方向性を転換し、社会学的な質的分析をベースに多くの新聞記事の参照やテキストマイニングを用いた内容となっております。そのため、これまで研究誌をお読みいただいた方には全く新しいものと感じられるかもしれません。

さて、「鉄道」の役割と聞いて、最初に想起されるものは何でしょうか。第一には「運搬」の役割でしょう。大量の人や物資を迅速かつ安定的に輸送できるという点は鉄道の大きな特徴です。また、私どものようなマニアにとっては、鉄道は「趣味」としてそれ自体で目的になっているともいえます。乗り、撮り、音、模型などとその趣味も細かく分ければ多岐に渡ります。しかし、それ以外の重要な役割として、鉄道はそれが走る地の「象徴」となるという側面も考えられるのではないかと、ということに焦点を当ててこの研究を進めました。ここ最近、全国各地で多く見られるジョイフルトレインはまさにこの一例でしょう。たとえば、弊団体が今夏のサークル旅行で訪れた愛媛県の松山市には「坊っちゃん列車」という SL が路面電車の軌道をゆっくりと走っています。運搬機能という面では普通の車両に比べて輸送量でもスピードでも劣りますが、乗って・見て楽しい列車として周りの観光客から大きな人気を集めていました。まさにこの列車が松山の風景の「象徴」としてとらえられていた、といえるでしょう。

本研究では対象範囲をさらに拡大し、鉄道は「国」としての統合意識・愛着意識を想起させる象徴としての機能も有しているのか、ということを考察しました。本書では現代日本のみならず明治期以降の近代日本や他国の事例も対象とし、多くの新聞記事を参照して文章の質的分析やテキストマイニングソフトを用いる手法を採りました。第1部の第3章では「先

行研究」としてアメリカや清国などの事例を参照し、第2部では近代日本を4つに区分して参照した新聞記事の分析結果をまとめる、という構成となっております。至らぬ点は多々あるかと思われませんが、これまでとは大幅にテイストを変えた今年の研究誌をお楽しみいただければ幸いです。

一橋大学鉄道研究会第56代部長